

令和6年5月15日

ユーラスエナジーホールディングス株式会社
代表取締役 諏訪部 哲也様

一般社団法人日本生態学会北海道地区会
会長 仲岡雅裕

(仮称) 宗谷管内風力発電事業 環境影響評価方法書に対する意見書

北海道宗谷管内における風力発電機(以降、風車)は、本事業を含めた32事業により915基が建設される予定である。(仮称)宗谷管内風力発電事業は、事業実施想定区域(以降、区域)が稚内市、宗谷郡猿払村にまたがる宗谷丘陵地区、及び天塩郡豊富町及び幌延町にまたがる上幌延地区の2地区で約15,000 haに及び、現在までに宗谷管内で計画・稼働中の風車の20%以上に相当する最大160基を建設するものである。本事業の実施は、宗谷管内の広大な区域に高密度で風車が建設されることを意味し、建設に伴う直接的影響に加え、風車数の増加に伴う累積的影響により野生動植物の種・生態系・景観レベルでの大きな影響を引き起こすことは疑いない。特に、宗谷丘陵地区には「幻の魚」と言われるサケ科魚類イトウ(*Parahucho perryi*)の国内最大の繁殖地が含まれ、建設に伴うイトウを取り囲む生態系への影響は軽微とはならず、当該地域のイトウの絶滅は国内のイトウの絶滅を意味する。

宗谷丘陵地区のうち分水嶺となっている尾根の東側は、イトウが生息する河川の源流部に位置し、自然度の高い植生がモザイク状に発達した生態系が成立している。また、地区の一部は、生物多様性の保全の鍵になる重要な地域(KBA)に選定されている。上幌延地区についても、北側半分以上がKBAに選定されている。さらに両地区共に、大半が土砂流出防備保安林、水源涵養保安林に指定されている。これらのことから、生態系・生物多様性保護の観点から、両地区ともに単一の景観として広域的に保護することが重要である。

本事業は、このような保全上重要な生態系を大規模に改変するものであり、この地域で長年保たれてきた動植物相にもたらす影響が極めて高い。そのため、現在計画されている風車の建設中止を含め再考するよう、下記の通り要望する。

記

事業実施想定区域の生態学的重要性

本事業の二つの地区は、生物多様性保全上の重要度が極めて高く、風車建設地として不適切である。

1. イトウの国内最大の生息地

宗谷丘陵地区には、日本最大級の淡水魚である希少種・サケ科魚類イトウの数少ない繁殖地が広く含まれる。イトウは、現在の日本では北海道の10数河川でしか繁殖が確認されておらず(江戸 2007)、環境省は2007年に本種を絶滅危惧IB類に選定した。国際自然保護連合(IUCN)は、2006年に本種をレッドリストで絶滅危険度が最も高いCRランクに選定し、さらに絶滅が危惧され緊急に保全されるべき世界の水生生物50種に選定した(Edmondstone et al. 2022)。

イトウ個体群が維持可能な水系は6つ報告されており、うち4水系(猿払川、猿骨川、天塩川、声問川)が道北に位置している(江戸 2007、福島ほか 2005)。これら4水系のイトウが産卵を行うのは、宗谷丘陵内陸部の蛇行河川である。イトウの生息数は、猿払川で際立って多く、支流の狩別川では毎年300-400尾が産卵のため遡上する(Rand & Fukushima 2014)。この産卵地では国立環境研究所が中心となった保護増殖活動が行われ、近年個体数増加の兆しが出てきた。イトウが絶滅した他水系との比較から、本地域でイトウが存続できた要因の一つとして、源流域に至るまでの集水域において森林伐採が回避されてきたことが挙げられている(Fukushima et al. 2011)。

2. 希少鳥類の渡りルートおよび繁殖地

宗谷丘陵・上幌延地区は、オオワシ・オジロワシ(ともに絶滅危惧II類)などの海ワシ類が、秋には宗谷岬からそれぞれ道央・道東に南下するルート上に、春には北上するルート上に位置する。また、国内希少野生動植物種に指定されているワシミミズクの生息地が、宗谷丘陵地区の近隣で発見された記録がある(藤巻 2014)。そのため、地区の一部がKBAに選定された経緯もある。「風力発電における鳥類のセンシティブティマップ」では、宗谷丘陵および上幌延地区はそれぞれ主に「注意喚起レベルA3」および「注意喚起レベルB」であり、これらの希少種が風車に衝突するリスクが高い地域である。

3. 自然度の高い植生・生物多様性保全上重要な地域

宗谷丘陵・上幌延地区共に植生自然度が9あるいは10と高い原生的な植生がモザイク状に分布している。具体的には、ササ群落(自然度10)、トドマツ-ミズナラ群落(自然度9)、エゾイタヤ-ミズナラ群落(自然度9)が広範に見られる。また、上幌延地区の北側半分はKBAに選定されている。そのため、これらの原生的な植生・生態系が、両地区のイトウを始めとする希少種の生息を支えてきたといえる。また、両地区の保安林機能は高く、大半が保安林指定されている。中でも、水源涵養保安林は代替のきかない保安林として知られるが、両地区の半分以上の面積は水源涵養保安林である。そのためこれら地区は、隣接地域と連続した自然度の高い生態系を構成した多様な動植物の生息地となっている。

本事業計画の問題点

本事業の環境影響評価方法書(以下、方法書)には、以下の通り重大な問題点があり、建設

中止を含めた再考が必要である。

1. イトウ繁殖河川への風車施設施工による影響

第一の問題点は、風車施設施工そのものがイトウの生息地を減少あるいは劣化させることである。当事業計画では、出力4,000 kwから7,000 kw、ハブ高85 mから125 mの大型風力発電機設置を予定している。このため、設置に伴う地盤整備と基礎設置は相当の面積を必要とする。風車建設1基から発生する切土量は18,000 m³から22,000 m³、切土・盛土量は360,000 m³に達すると見積もられる。切土・盛土に対して浸食防止措置を施しても、自然植生状態の400倍から500倍の流出量に相当する土量の1%は河川へ流出する可能性がある(山根ほか 1965)。区域の地質は礫岩、砂岩、泥岩が主体で軟弱なため、風車建設では風車を支えるための杭基礎が必要であるが、杭基礎工により大量の泥水が発生する。しかし、沈殿後放流しても、粘土コロイドは完全には除去できない。また、杭の施工や切土そのものが、地下水流動を変化させることもある。

イトウが生息する河川の源流部を含む地域に上記大型風車が建設されれば、土砂流出、粘土コロイド流出、河川流量変化により、河川生態系に甚大な影響があることが予想される。土砂や粘土コロイドは、河川流路の部分的閉塞による停滞水の発生を助長し、河川水の溶存酸素濃度を低下させる。イトウを始めとする河川性魚類は、河川水の溶存酸素濃度などの環境変化に鋭敏であり、溶存酸素濃度低下による大量死は過去にも報告されている(北海道新聞デジタル 2022)。また、土砂や粘土コロイドは、イオン態アルミニウムを発生させ、水生生物の鰓(えら)に損傷を与えるとの報告がある(越川・高松 2004)。さらに、イトウ生息河川の源流部付近で、風車建設により土砂体積が進めば、卵や仔稚魚の生存率が大きく低下する可能性もある(朝日新聞デジタル 2024)。

区域に生息するイトウは、本種を保全するうえで極めて重要な個体群であるが、近年の猛暑・渇水によって大量死する事例が報告されており(朝日新聞デジタル 2021)、こうした気候変動による脅威が顕在化する中で、上記のような甚大な環境変化をもたらす風車建設を行えば、本種の絶滅を加速する。

2. 事業地の絞り込みに対する科学的根拠の欠陥と累積的影響

第二の問題点は、方法書では計画段階配慮書の事業想定区域から絞り込みを行ったにも関わらず、その生物多様性保全上の効果の科学的根拠は示されておらず、さらに周辺事業との累積的影響には触れられていない点である。方法書の両地区には、依然としてKBA、保安林、自然度の高い植生が多く含まれている。また、これらの地域はバードストライクのリスクの高い希少猛禽類の生息地である。全道的にこれらの稀少種がバードストライクにより死亡する事例が後を絶たず、従来通りの事業地の絞り込みや対策の実施だけでは、これらを防ぐことは出来ない。貴社が幌延町に建設した「浜里ウインドファーム」では、2023年5月の稼働以降3月までの10か月の間に3羽ものオオワシ・オジロワシが死亡しており(NHK北海

道 2024)、貴社の事業地の絞り込みに問題があることは明らかである。さらに、宗谷丘陵地区は、大半が仮称・宗谷丘陵南風力発電所の事業地と重複しており、同一地区への風車建設による累積的影響の予測評価は必要不可欠であるが、そのような配慮は一切なされていない。

3. 希少種等の文献調査および専門家へのヒアリングの不足

第三の問題点は、区域内外に生息する希少・絶滅危惧動植物、外来生物に関する文献調査および専門家へのヒアリング等が不十分か、あるいは、文献調査・ヒアリングの内容が動植物への風車建設の影響の予測評価に適切に反映されていないことである。例えば、専門家も回答しているように、宗谷丘陵地区を源流とする河川でイトウが繁殖していることは既知であるにも関わらず、配慮書からの事業地の絞り込みの過程で考慮されず、方法書では繁殖していることを前提とした具体的な調査計画も示されていない。絶滅危惧種の日本最大の繁殖地の保全を図るのは必須となる事項である。加えて、適切な結果を得るには、短時間では困難であり、現段階から具体的な調査計画を提案・実施すべきである。

豊かな生態系は、地域社会に様々な経済的・非経済的な価値をもたらしており、風車建設は、生態系への負荷が微小な地域で行われなければならない。風車が林立する道北地域においては、広域での累積的影響の評価も必要であり、既に過剰な風車の設置が認められる地域と判断されれば、事業地の再検討も必要となる。生息地保護および予防原則の観点からも、生態系に影響が出る可能性がある場所での風車建設は避けるべきである。今回の風力発電事業においても、この自然の価値を科学的に評価し、適切な判断が行われることを要望する。

以上

令和6年5月15日

(仮称) 宗谷管内風力発電事業 環境影響評価方法書に対する意見書 添付資料

1) 引用・参考文献

- 朝日新聞デジタル. 2021. 「川の王者」相次ぐ死 猛暑の北海道、河川で何が
(<https://www.asahi.com/articles/ASP864645P86IPE001.html>)
- 朝日新聞デジタル. 2024. 土砂流入で「幻の魚」イトウ危機 産卵場所に泥 卵流されマスのエ
サ(<https://www.asahi.com/articles/ASS4T1CPYS4TIPE00FM.html>)
- 江戸謙顕. 2007. イトウの生態と保全. 北海道の自然 45: 2-10
- Edmondstone MRJ, Böhm M, Harrison I, Patricio H, Grabowski N, Contreras-MacBeath T. 2022. Fantastic
Freshwater: 50 landmark species for conservation, SHOAL, Indianapolis Zoo Global Center for
Species Survival, IUCN Species Survival Commission, Freshwater Conservation Committee, London.
80 pp
- 福島路生・岩館知寛・金子正美・矢吹哲夫・亀山 哲. 2005. 北海道における河川・流域環境の変
遷 直線化による河川環境の均質化について. 地球環境 10: 135-144
- NHK 北海道. 2024. 幌延町 風力発電所 オジロワシなど3羽が風車に衝突して死ぬ
(<https://www3.nhk.or.jp/sapporo-news/20240418/7000066375.html>)
- Rand PS, Fukushima M. 2014. Estimating the size of the spawning population and evaluating
environmental controls on migration for a critically endangered Asian salmonid, Sakhalin taimen.
Global Ecology and Conservation 2: 214-225
- Fukushima M, Shimazaki H, Rand PS, Kaeriyama M. 2011. Reconstructing Sakhalin taimen *Parahucho
perryi* historical distribution and identifying causes for local extinctions. Transactions of the
American Fisheries Society 140: 1-13
- 藤巻裕蔵. 2014. ワシミミズク(レッドデータブック2014 -日本の絶滅のおそれのある野生動物- 2
鳥類). 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室編, 株式会社ぎょうせい 58-59
- 山根一郎 ほか. 1965. 牧草 作り方と使い方. 農山漁村文化協会 259 pp
- 北海道新聞デジタル. 2022. 「幻の魚」イトウ、激減する恐れ 道北・猿払で起きている異変([https://
www.hokkaido-np.co.jp/article/700604/](https://www.hokkaido-np.co.jp/article/700604/))
- 越川(金尾)昌美・高松武次郎. 2004. 土壌-河川-湖沼系におけるアルミニウムの動態と化学. 地球
環境 9: 83-91